

小山実稚恵さんの新たなコンサートシリーズ、「ベートーヴェン、そして…」が6月23日にスタートします(会場 いずみホール)。2020年のベートーヴェン生誕250年をはさみ、'21年まで全6回(毎年春・秋2回開催)で構成します。内容は、ベートーヴェンのピアノ・ソナタの後期5曲(第28~32番)を軸にバッハ、モーツァルト、シューベルトのピアノ曲を組み合わせ、「演奏曲全ての個性を浮き彫りに」(小山さん)していきます。シリーズについて小山さんに聞きました。

## 小山実稚恵の新シリーズ 6月スタート

### ベートーヴェン、そして…

#### 後期ソナタ + “影響し合った作曲家の作品” で構成

— 新シリーズは、「ベートーヴェン、そして…」のタイトルで、2019年から21年までの3年間にわたり、ベートーヴェン(1770~1827)のソナタ5曲(第28番から最後の32番まで)を軸に展開されます。

小山 ベートーヴェンに取り組みたいという気持ちはピアニストとして演奏活動始めて以来、自然と強くなってきていましたが、12年間24回にわたる「ピアノ・ロマンの旅」の次の演奏活動について考えたとき、ぐっと湧き上がってきたのがベートーヴェンでした。2020年はベートーヴェンの生誕250年ですので、それをはさんでのシリーズ開催になります。

実は当初、ベートーヴェンのソナタ全32曲の演奏も検討しました。しかし、私の中では“後期ピアノ・ソナタ”の存在があまりに大きかったので、プログラムをいろいろと考えた末に、ベートーヴェンは第

28番から32番の最後の5曲のソナタに集中することにしました。これは、全32曲の連続演奏会とは違った意味で、大きな価値があると考えています。

#### # 圧倒的傑作のベートーヴェン後期ソナタ

— ベートーヴェンのピアノ・ソナタには、第8番『悲愴』(作曲1797~98)、第12番『葬送』(同1801~02)、第14番『月光』(同1801)、第23番『熱情』(同1804~05)といった、名を知られた傑作曲が少なくありません。いずれも、いわゆる初期または中期の作品です。その中で、後期の第28番から32番までを選ばれたのは…。

小山 ベートーヴェンの“後期ピアノ・ソナタ”は圧倒的な傑作ばかりです。ご存じのように、ベートーヴェンはこの時期(1816年頃から没する1827年

#### 「ベートーヴェン、そして…」は 3年間、全6回のシリーズコンサートです

- 第1回 2019年6月23日 《敬愛の歌》  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第28番  
シューベルト：ピアノ・ソナタ第13番  
シューベルト：幻想曲 作品90・作品142 より
- 第2回 2019年11月24日 《決意表明》  
モーツァルト：デュポールの主題による変奏曲  
モーツァルト：ピアノ・ソナタ第13番  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番  
「ハンマークラヴィア」
- 第3回 2020年6月(予定) 《知情意の奇跡》  
\*ベートーヴェン生誕250年記念  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第30番  
バッハ：ゴルトベルク変奏曲

第1回券・第1・2回セット券発売中

- 第4回 2020年11月(予定) 《本能と熟成》  
\*ベートーヴェン生誕250年記念  
(プログラムなど調整中)
- 第5回 2021年6月(予定) 《結晶体》  
ベートーヴェン：6つのバガテル  
バッハ：半音階的幻想曲とフーガ  
モーツァルト：幻想曲(二短調 K.903)  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番
- 第6回 2021年11月(予定) 《異次元へ》  
シューベルト：ピアノ・ソナタ第19番  
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第32番

お問い合わせは 大阪新音 ☎ 06-6926-4888) まで

まで)、耳はほとんど聞こえず体調も悪化、身内のごたごたや家計窮乏、演奏活動不調に至るまで、さまざまな苦難に襲われます。ところがベートーヴェンは底力が違いました。創作意欲は衰えるどころか、大曲・傑作曲を続々と完成させてゆきます。ピアノ・ソナタでは第28番を皮切りに、大曲の29番『ハンマークラヴィーア』ほか32番までの計5曲。弦楽四重奏曲は第12番から16番までの5曲。そして生涯最高の作といわれる荘厳ミサ曲、第九交響曲などです。絶望的な境遇にあっても、さらなる高みを目指していくベートーヴェンの“魂の強さ”は驚くばかりです。

“後期ピアノ・ソナタ”の5曲には、変奏やフーガ(\*1)が入っています。ベートーヴェンはそうした技法を駆使し、天才的な構成力によって、自身の不遇を人間全体の苦しみに普遍化し、それに打ち克つための気力を音楽に表現したと私は思っています。感動で本当に心が震えます。それが、このシリーズの軸に5曲の“後期ピアノ・ソナタ”を据えた理由です。

### # “そして…”の中身

— シリーズ各回のプログラムには、ベートーヴェンのソナタと併せて、バッハ、モーツァルト、シューベルトのいずれかの作品が組み込まれています。テーマの「ベートーヴェン、そして…」の“そして…”は、3作曲家の作品との組み合わせを指しているのです。これには当然、小山さんの想い、メッセージが込められていると思います。

小山 ベートーヴェンのソナタを“主役”として、一緒に演奏する曲をどのように組むか、いろいろと考えました。決して“添えもの”ではなく、ベートーヴェン作品と同等もしくはそれ以上の曲、ベートーヴェン作品とともに演奏することで互いの個性が明瞭になるような曲、また、作曲者や作られた背景を知らずともピアノ音楽をたっぶり楽しんでいただける曲を…。そしてたどり着いたのが「ベートーヴェンに影響を与えた作曲家、ベートーヴェンに啓発された作曲家」なのです。

ベートーヴェンに影響を与えた作曲家の代表はバッハ、ハイドン、モーツァルトでしょう。しかし啓発された作曲家となると数え切れません。絞りに絞って、バッハ、モーツァルト、シューベルトの3作曲家の作品との組み合わせにしました。12年間24回の「ピアノ・ロマンの旅」でもそれら3作曲家の曲

を演奏していますが、そのとき重点を置いていたのは“ロマン”でしたので、今回はもちろん、新たな演奏姿勢で臨みます。

### # バッハに学んだベートーヴェン

— ベートーヴェンとバッハとは生きた時代も音楽も異なります。どのようなつながりでしょうか。

小山 J.S. バッハ(1685~1750)はバロック時代の音楽家ですが、今に至る西洋音楽(クラシック音楽)の源流と評される普遍的存在です。謹厳な性格を映し、作品はどれをとっても節度と調和があります。突然に激情することなく、聴く者に安定と躍動、そして感動を与えます。とくに理想と現実との調和にはため息が出ます。音楽技法においても、平均律音階(\*2)やフーガによる対位法(\*3)の採用など大きな業績を残しました。「平均律クラヴィーア曲集」は後続の作曲家・鍵盤奏者にとって常に教科書的存在であり続けています。ベートーヴェンも師のネーフェの手ほどきで「平均律クラヴィーア曲集」を若いころから学び、自身もフーガを研究し、晩年になってからもバッハの対位法を再勉強しています。第29番のソナタ「ハンマークラヴィーア」のスケッチには平均律第2巻 変ロ長調のフーガ、そして嬰ハ短調のフーガの断片が写されています。

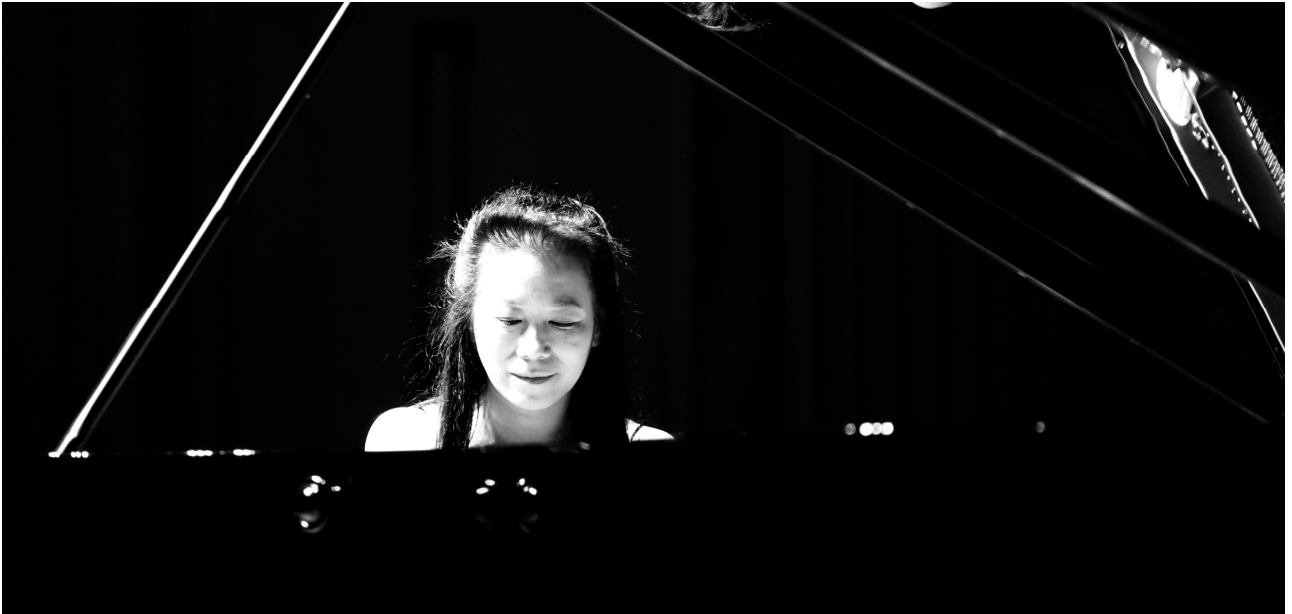
シリーズ第3回(2020年6月)にはベートーヴェンのソナタ第30番とバッハのゴルトベルク変奏曲を演奏しますが、これはゴルトベルクと30番のソナターとくに第3楽章を聴き比べていただきたいと思ったからです。私はこの曲を演奏するとき、いつもベートーヴェンの中にバッハを感じています。

### # “美のモーツァルト”を強く意識

— ベートーヴェンとモーツァルトにはどのようなつながりがありますか。

小山 モーツァルト(1756~1791)は、ベートーヴェンより14歳上です。モーツァルトがウィーンでもてはやされていた頃、ベートーヴェンはウィーンに旅し(1787年)、モーツァルトを訪問したそうですが、本人とは会えなかったようです。でも、2人の天才がどこかで遭遇していた可能性が無くはないような気もするのですが…。ベートーヴェンがハイドンに弟子入りするため、生まれ育ったボン(ドイツ)からウィーン(オーストリア)に移住したのは1792年ですので、すでにモーツァルトは亡くなっていました。

モーツァルトは驚異的な美意識をもった作曲家で



す。その作品はどれも本当に美しく、ウィットにも富んでいます。ベートーヴェンは、モーツァルトのそういう自在で上質な音楽に憧れを持つとともに、自身の音楽にも相当な自負を持っていました。音楽家としてモーツァルトを尊敬しながらも、作曲家として常に意識していたことが、ベートーヴェンの多くの作品から感じることができます。たとえば、モーツァルトの大変珍しい編成（ピアノ、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴット）の五重奏曲(K. 452)と、全く同じ編成、同じ調性を使って、ベートーヴェンも五重奏曲(作品16)を作曲しています。それから、モーツァルトのピアノ協奏曲第20番(作曲1785年)のカデンツァ(\*4)ですが、ベートーヴェンが作曲したもの(WoO. 58)があります。強さと美しさに満ちたこのカデンツァは現在でも大変有名で、モーツァルトの協奏曲の魅力がさらに引き立つ素晴らしいカデンツァです。ほかにも歌曲の一節を主題にした変奏曲なども…。やはりモーツァルトに対する意識は、特別なものがあったのでしょう。

#### # とともに音楽を熱烈に愛したシューベルト

— では、シューベルトについては…。

小山 シューベルト(1797~1828)は、ベートーヴェンに絶対ともいえる尊敬心をいただいていた作曲家です。ウィーンに生まれたシューベルトが作曲家をこころざした頃には、ベートーヴェンはすでに大作作曲家の評価を確立していました。シューベルトがお金を工面してベートーヴェンの演奏会に足を運んだという記録もあります。真偽のほどは定かではありませんが、ベートーヴェンを目標としていたシューベルトは第九交響曲を聴いて、その圧倒的スケール

に打ちのめされ、自分が書き進めていた交響曲を途中で断念した——それが後に発見されて『未完成』と名付けられた——という話もあるくらいですから…。ベートーヴェンが亡くなったとき、シューベルトは葬儀に参列し、棺を担いだといわれています。

エピソードはともかく、シューベルトはベートーヴェンとともに音楽に熱烈な愛を注ぎ、ロマン主義の開拓者となりました。今回のシリーズの第1回をシューベルトの曲で始め、最後の第6回に再びシューベルトの曲を配したのは、私がシューベルトの音楽をこよなく愛していること、そして両作曲家の“音楽への愛”をこのシリーズで奏でたかったからです。

#### # 各回タイトルは 私からのメッセージ

— シリーズの各回には、先の「ピアノ・ロマンの旅」と同様にサブタイトルが付されています。

小山 そうですね。「ベートーヴェン、そして…」の総タイトルのもと、1回ごとの演奏会にサブタイトルを付けました。いわば各論の標題です。ベートーヴェンの生きざまと音楽思想、他の3人の作曲家とのかかわりなどを総合して考えました。それらは私の“想い”であり、皆さまへのメッセージとして受け止めていただけると嬉しいです。

たとえば第1回(2019年6月23日)は「敬愛の歌」です。これは、先にお話ししましたように、ベートーヴェンとシューベルトの“音楽への愛”、そしてベートーヴェンのソナタ第28番が、自分のピアノの弟子で人格的にひじょうに“敬愛”していたエルトマン男爵夫人のドロテアンに献呈されていること…などを考えてのことです。

## # ピアノの進化を促したベートーヴェン

— ところで、第2回(2019年11月)で演奏される第29番ですが、なぜ『ハンマークラヴィーア』と呼ばれるのでしょうか。

小山 イタリア語の“ピアノフォルテ”のドイツ語訳がハンマークラヴィーアだからです。実は、ベートーヴェンのソナタ第28番と第29番の初版楽譜には、2曲とも「ハンマークラヴィーアのための大ソナタ」とタイトルが書かれています。なぜか第29番の方だけが『ハンマークラヴィーア』の愛称で呼ばれるようになりました。

ベートーヴェンが生きていた時期、“ピアノ”は発展途上でした。アクション(弦を打って音を発する機構)やダンパー(音を消す機構)に工夫が重ねられ、楽器の構成要素が変化し、新しいピアノは作られるたびにどんどん高性能になって、音域も広がりました。ベートーヴェンはヴィオラも弾きましたが、なんといっても素晴らしいピアノ弾き。若いころは作曲家というよりもむしろ大ピアニストとして世に知られる腕前でしたから、作曲は常に“ピアノ”で行われていました。進化していく“ピアノ”を自ら試しながら、ベートーヴェンはピアノの発達と共に作品を変化させていったわけです。それだけでなく、ベートーヴェンの方からピアノ製作者にいろいろな意見を申し、現実的な要求を伝えてピアノの進化を促す役割も果たしていたわけです。ソナタ第29番「ハンマークラヴィーア」(1817~18)を作曲し始めた頃は、ベートーヴェンはシュトライヒャーのピアノを使っていました。その作曲の最中(1818年2月)に、イギリス製のブロードウッドのピアノがロンドンか

ら届きました。早速にそれも使いながら作曲を続けたため、『ハンマークラヴィーア』ソナタには楽章によって使用音域が違うという不思議な現象が起きました。第1楽章から第3楽章まではシュトライヒャーのピアノの音域(ブロードウッド製ピアノでは出せない高音域が含まれている)、第4楽章がブロードウッドのピアノの音域(シュトライヒャー製ピアノでは出せない低音域が含まれている)、というわけです。

新しいピアノ(ハンマークラヴィーア)を使いながら、新たな音楽表現を実現可能にし、さらに将来のピアノの発達を見据えて、可能性をとことん追求した作品が、第29番ソナタ『ハンマークラヴィーア』と言えると思います。ベートーヴェン本人が「この作品は、今後50年はこの曲を演奏しようとするピアニストを忙しくさせる」と語ったと言われていますが、このソナタこそ永遠の難曲、ピアノ曲の歴史を変えたソナタだと思います。

(インタビューは2018年9月に行いました)

- \*1「変奏」 主題または特定の旋律を、リズム、拍子、和声などを合わせてさまざまに変形させる技法。  
「フーガ」 楽曲形式の一種で、曲の途中から、前に出た主題や旋律が次々と追いかけるように現れ、曲が進行していく。フーガの技法はJ.S.バッハが完成させたといわれている。
- \*2「平均律音階」 1オクターブ(ドから次のドまで)をどのような間隔で区切ると、それぞれの音が美しく響き、かつ転調も合理的にできるかを研究し、得られた音階のこと。バッハ時代と現代とは平均律にも差異がある。現在は12音階が定着している。
- \*3「対位法」 独立して進行する二つ以上の旋律を、うまく調和させながら重ね合わせる技法。
- \*4「カデンツァ」 楽曲の中で、演奏者が即興で技巧を聴かせるために設けられた部分のこと。

◆小山さんのお話は 今後も随時、『シリーズだより』などでお知らせします。



## 「ピアノ・ロマンの旅」アンコール公演(11/18)から

### ▽ 四条畷市・Kさん

自分も結構コンサートは聞いている方だと思っていますが、一部の曲目がアンケートの上位にでてくるとするのは驚きでした。小山さんの設定されたテーマで聴く側がきちんと受け止めた結果だったのだと思います。個人的にはバッハはゴールドベルク変奏曲を聴きたいところでしたが、二部はとてもメジャーな曲、響きの美しい曲が選ばれたようで、気持ちよく演奏を聴かせていただきました。

### ▽ 藤井寺市・Kさん

小山さんの演奏は楽しみにしていました。力強いタッチに職人のような気がしました。今後も都合が

つけばぜひとも期待しています。

### ▽ 大阪市平野区・Iさん

音大の学生をもう少しで修了しようという時期に初めて今回の演奏会に来ました。小山さんの演奏には今までの技術や知識はもちろんのこと、音の放物線が全ての曲に溢れ、様々な色彩感に魅了されるばかりでした。

### ▽ 大阪市北区・Tさん

シリーズが終わってしまった時に、もの悲しさがありました。また新しいシリーズで楽しみが増える感じがします。公演が終わっても次があるのでイイです！